

『PHP』一九六〇年五月（PHP研究所）

好人物の夫婦

志賀直哉氏の作品から

矢口 新

志賀直哉氏の作品にこういう題の短篇がある。これは夫婦の間柄をとり扱ったものであるが、夫婦像などという私はいつもこれを思い出す。はじめて読んだのは十七、八才の頃だから、三十年間私の頭にきざみこまれているのである。自分でも不思議なことだと思いが、どういふわけなのか。この原稿を書くので、読み返して考えてみた。

話は、夫が旅行に行きたいと細君に言うところからはじまる。細君は行ってもいいけど、へんなことをしてはいやだ、そんなことがないとはつきり言えば、旅行してもいいという。それに対する夫の答えが、私のむかしからよくおぼえているクダリである。

「きつとそんな事をしようというんじゃないよ。しないかも知れない。そんなら多分しない。なるべくそうする。しかし必ずしもしくないかも知れない」

この夫は、細君に対して意地わるいくらいに正直である。馬鹿正直といつてもよいかも知れない。これは出来ないことである。こういうなまけた気持を夫がそのまま正直に云うことが出来るのは、余程の夫婦である。

ここには夫のわがままもある。細君は認めないのだが、しかしこのわがままには一種の甘ったれがある。やはりたいした夫婦である。

夫は結局、旅行に行かないことになるが、運命のいたずらには、逆に細君がおばあさんの病気の看病で四週間もの間、家を守るすにしなければならなくなる。そしてそれから三、四カ月たったある日のこと、夫は女中が物かげでゲーターと吐いているのを見て、つわりだと察する。そしてこれは大変だと思う。「これは先ず自分が疑われる」「しかし実際自分が疑われても

仕方ない。事実になんか事はないから、そういう気を全く起きさなかったとは言えないからと思つた」

この夫の反省は極めて素直である。自己に対して極めてきびしい。この夫はわがままではあつても、独善的ではないようである。

そこで夫は、これはやはり自分から言い出さなければならぬと考える。そういうえば、この二、三日細君が元気がないのは、このことに関係があるにちがいないと思ひ当る。この心づかいはなかなかこまかい。

「そんな元気がない顔をして、どうしたんだ」

「……お前は俺が時々吐くような変な声を出しているのを気がついてるか？」

「お前は知っているね」

「知っているなら尚いい。しかしそれは俺じゃないよ」

こんな風に話しかける。細君は唇をふるわしていたが『ありがとう』というのと、その大きく開いていた眼からは涙がとめどなく流れて来た。彼は実際しなかつたにしろ、それに近い気持をもつたことを今さら心に恥じた「このきわどい話はこんな風にして終りをつける。」

好人物の夫婦という題は、この話には当たらないかも知れない。志賀さんは『メーテルリンクの知恵と運命』に感心し、愚かさから来る誤解や意地張りで悲劇を作ることがいかに下らないかという事を思い、それから救われる場合の一つとしてこの小説を書いた」といつておられる。

この夫婦はただ人が好いのではない。人がよいというのは、とかくルーズを伴ないがちである。夫婦の間柄ではルーズなのはいけない。人間的な成長をとげていくためには、二人の間には強い緊張がなくてはいけない。緊張があると逆に余裕がなくなる。愛は惜しみなく他を滅却し、自己を滅却する、そこに間柄がやぶれるものがある。これを救うのは知恵であろう。しかし知恵はまたとかく愛情を冷たいものにしがちである。

ざつとばらんで、こまかしくつきあうということはなかなかきびしい態度である。このきびしさと、愛情と知恵とが、本物の夫婦をつくり出すのではないだろうか。

（国立教育研究所・教育内容研究室長）